

北海道土を考える会 十勝支部 冬期研修会を開催しました。

2025年4月1日



田中支部長

北海道土を考える会 十勝支部は、3月6日(木)に、十勝川温泉 観月苑にて冬期研修会を開催いたしました。テーマを【POWER OF SOIL】とした今回の研修会は、農研機構 農業環境研究部門(農環研)とスガノ農機の共同研究の一環として2024年10月に実施した藤内農産の土壌断面調査の詳細報告と帯広畜産大学 谷 昌幸教授による講演【土壌の力を使いこなせ2025】の2本立てで実施しました。

前島勇治氏による藤内農産

の調査報告では、速報として調査結果と理化学性についてお話しいただきました。当日の断面調査の内容と、今回報告された理化学性の数値結果により、土壌の状況が一層明瞭になり土壌に対する理解がすすむ内容でした。



谷教授

続いては帯広畜産大学 谷 昌幸教授の

講演。冒頭で「先日伺った九州沖縄土を考える会で調査した熊本県の火の国ファームさんも、入れて効果が出ないモノは引くと言っていました。10年以上の人参連作を続ける中、土壌中に含まれている養分(ごはん)がいっぱいあるなら肥料(おやつ)はいらないと、しっ

かりジャッジされていました。また、何とCECが87.1me/100g !!というシャインマスカットを栽培される農家さんにも伺う事ができました。北海道にいただけでは実際に得ることができない知見を九州で多く得ることができました。皆さんも他地区の土を考える会に参加されることをお勧めします。」との前置きの後、リン酸をターゲットにした北海道の状況についてのお話しとなりました。「北海道では、初期生育を安定させ、寒さ対策にもなるということから、リン酸を入れ続けてきた結果、ほとんどの土壌がリン酸過剰になっています。こんなことから、減肥を考える時にはリン酸がポイントになってきます。今回の土壌診断票を見てもリン酸ゼロでいけると思われるところが沢山ありました。土壌診断を活用して、良く分かってくると、必要なモノは入れるが、必要無いモノは入れないというのがはっきりして



前島先生

きます。ゼロにするのは心配と考えられる方も、貯金は十分なので、使用分の差引き程度の施用にチャレンジすれば、コストも下がるし、環境にも良いので、イイことづくめです。」ここからは寄せられた30点の土壌診断票を見ながら、いつものガチンコの数値確認検討会。皆さんの施肥体系が大きく変化する予感です。

翌日の北海道土を考える会役員会では、北川会長ら全道の役員が集まり、7月10日(木)に上富良野で夏期研修会を開催することに決定しました。全国からのご参加をお待ちしております。



前島先生の断面とくちコメント

北海道広尾郡大樹町尾田 藤内農産(前作:緑肥) 忠類台地上に年代の異なる火山灰や軽石が堆積してできた土です。深さ35cmの暗褐色の作土層は新しい火山灰(樽前山)で、ブラウ耕により緑肥がすき込まれ、団粒状構造が発達しています。深さ35-60cmの黄褐色土層は古い火山灰(恵庭岳)で“ボール状構造”と呼ばれる土壌構造が発達し、その下には支笏カルデラ形成時に噴出したオガクズ状の軽石が50cmほど堆積し、110cm以深は起源不明の火山灰層や礫層へと続きます。作土直下に硬く締まった層はなく、排水性・保水性ともに良好で、緑肥の根は深さ約70cmまで達しています。一方、深さ40cm以深の黄褐色土層や軽石層はリン酸の吸着力が非常に強いので、下層土の扱いには注意を要するでしょう。また作土層は軽しうなため、季節風による風食や融雪時の水食から守ることも大切です。



展示されたモニリスを説明する前島先生

